底した能率測定方法^マわなかった」(原文はカタカナ、淵時智、1931b:620)と評価し、原文献に掲載された査定フォームを復刻するとともに翻訳し、査定者用の指導書も翻訳したのである。興味深いことは、1923年公務分類法の紹介にスペースをあてるとともに、今日の概念でいう職務分析の必要性を、淵がとくに強調していることである(淵時智、1931b:620)。掲載誌の『産業能率』は日本能率連合会の機関誌であるが、これは『能率研究』の後継誌であり、上野陽一が編集と発行を担当した(齊藤毅憲、1983:70)。

松田竹太郎(1931)は、米国マサチューセッツ州リン市にあるGEのRiver Works 事業所を実際に訪問し、その査定制度の実例を聞き取り調査した調査報告論文である。調査時(広く考えても1927-30年の間)と内容の点で、きわめてユニークである。論文末に、従業員各層用の4種類の査定フォームを復刻する。すなわち、「一般職工用」「記録工用」「図工用」「役付職工用」それぞれの査定フォームである。また「一般職工用」査定について、その査定結果の実際の分布を聞き取り、報告した。それによると、評価段階は優から劣の順に6段階(第4段階が標準)であり、査定結果の分布は7%—13%—28%—45%—6%—1%であった。そして松田は、査定結果が上位にかたよる懸念について質問を行い、「GE社の人」からつぎの回答を得た。「何事でも遣り初めには之に従事する人々が精神を了解しない為に有効に働かないものであるが年月を経過すれば完全となる。当社でも初めの二三年はあまり成績が良くなかったが今では完全と云ってもよいと思ふ。」⁽⁸⁾

松田の肩書は「海軍造機大佐 工学士」であり、「[日本で]数年前同様の試みを行って組長級以上の者に部下の記録を作らせたことがあった[から]」と調査関心を述べ、「官命に依り米国に滞在中」にRiver Works 事業所を訪問調査したことを述べた。松田竹太郎(1931)を掲載した『九州機械工業會誌』は一般的に普及した雑誌でない。しかし松田竹太郎(1931)は、戦前の他文献で言及されており、また、私が閲覧したそれは抜刷であって、労務管理実務家の旧蔵であった。したがって、それは当時の研究者と実務家には知られており、⁽⁹⁾影響力があったと思われる。